

【論文】

# 重度知的障害者と支援者との良好な関係の 形成過程に関する計量分析 —構造方程式モデリングによる検討—

奥西 允\*

**要旨：**本研究の目的は、構造方程式モデリングを用いて、支援者の視点から重度知的障害者との良好な関係の形成過程を検証することである。本研究では、利用者との間で起こった出来事の蓄積が、支援者の利用者に対する特定の意味づけを形成し、その意味づけが支援者の行動を方向づけるという作業仮説を設定した。方法は、支援者を対象とした質問紙調査である。その結果、支援者の視点からは、良好な関係の形成過程を構成する経路は、大きく二つ存在することが明らかとなった。一つは、「利用者の変化」という出来事の蓄積から「利用者理解」という意味づけを経由し、関係促進行動に至る経路であり、もう一つは、「支援者の変化」という出来事の蓄積から「利用者への不安や迷い」という意味づけを経由し、関係促進行動に至る経路である。ただ、「利用者の変化」は「利用者への不安や迷い」に対して負の効果をもっており、結果的に関係促進行動にも負の効果を持っていた。

**Key Words:** 重度知的障害, 対人関係, 構造方程式モデリング

## 1. はじめに

### 1. 問題意識

知的障害福祉を含む対人支援全般において、利用者と支援者との間に取り結ばれる関係（以下、対人関係）について、その重要性が指摘されてきた。特に重度知的障害<sup>1)</sup>を有する場合、生活のさまざまな場面において支援が必要であり、支援を受けることは「困り事が生じたことへの一時的な対処ではなく、日常生活の営みそのもの」（久野 2020 : 1）である。それゆえ、重度知的障害者にとって誰と一緒に過ごすかという対人関係の問題はより切実なものとなる。例えば、McLaughlin & Carr (2005) は、重度知的障害者の選択行動、支援者の自己評価、他の支援者からの評価という三つの視点から関係の質を評価し、関係の質と問題行動の関連を調査している。結果として、関係が良好ではない場合、問題行動の頻度が多いことが示された。そして、関係改善のための介入を行った結果、問題行動の頻度が減少したと報告されている。このことは、支援者との関係の質が、生活の質の一端を担っていることを示しているといえよう。そもそも知的障害者の生活の質に関する文献（例えば、Schalock 2004）では、人間関係が生活の質を構成する要素に含まれるが、重度知的障害者の場合、人間関係が家族や他の利用者、支援者に限定さ

2024年6月30日受付／2025年2月10日受理

\* 東洋大学大学院ライフデザイン学研究科

れてしまっている (Robertson et al. 2001). こうした状況は日本でも同様であると思われる (例えば, 立田ら 2013). そのため, 支援者との関係のありようについて, その重要度は相対的に増してしまう.

以上をふまえれば, 重度知的障害者と支援者との良好な関係の形成という視点からの研究の蓄積が望まれる. 良好な関係の形成という現象への理解を深めることは, 実践に対して参照枠を提供し, なんらかの示唆を与えると考えられる.

なお, 本研究は利用者と支援者との間に取り結ばれる関係を対象とするが, 支援者からの視点に焦点化する. 重度知的障害者と支援者との関係であれば, まずをもって支援者の視点から事態を考えていくべきだと考える. その理由には, 重度知的障害者に対するインタビュー調査や質問紙調査という方法の限界および参与観察にともなう時間の制約などをあげることができるが, しかしそれ以上に, 職業的立場にある支援者から良好な関係を築こうとすべきであると考えられるからである.

## 2. 良好な関係の形成に関する先行研究と研究目的

いくつかの研究では, 良好な関係の形成における転機, あるいはその指標となるものの一つとして, 楽しさ, 愛着や温かさといった肯定的な感情をあげている (鯨岡 1998 ; Forster & Iacon 2008). ほかに, 肯定的な感情が, 重度知的障害者と関わる支援者の動機づけになるといった報告もある (例えば, Johnson et al. 2012). 従来, 支援者の感情に着目した研究は, 感情表出 (Expressed Emotion) に代表されるように主として否定的な感情に着目してきた. しかし, 精神科スタッフの EE 研究をレビューした Berry et al. (2011) は, サービス利用者と支援者という関係においては, 批判や敵意よりも温かさといった肯定的な感情の有無が, 関係の質を示す指標となりうる可能性があるとして指摘している. 知的障害分野でも同様に, Hastings (2010) が, EE 研究に言及するなかで, 肯定的な感情や認識に焦点を当てる必要があるとしている.

支援者の肯定的な感情を主題とした研究には, Penninga et al. (2022) と奥西 (2024) がある. Penninga et al. (2022) は, 有意義な相互作用の瞬間の特徴といった, より焦点化した主題を明らかにしようと, 支援者たちにインタビュー調査を行っている. その結果, 「つながりを感じる」「他者にとって有意義である」といった感覚をもてる瞬間に, 支援者はかかわりを意味のあるものとして経験していた. 加えて, 支援者は, 利用者との有意義な相互作用に, 自分たちの行動や人員配置といった環境要因が影響を与えると考えていた. 特に, 注意深くすること, 時間をかけること, 忍耐力を持つことが重要であると考えていた. 奥西 (2024) は, Penninga et al. (2022) も含め先行研究をふまえ, 支援者たちへのインタビュー調査から, 肯定的な感情の生起に関する仮説的なモデルを生成している. その結果によれば, 次のようなサイクルが存在している. 肯定的に応答するといった支援者の行動が, 変化が起こる, 気持ちが共有できたといった肯定的な感情体験が起こる蓋然性を高める. そのような肯定的な感情体験は, 支援者や当事者の意欲の向上や変化を促す. その意欲や変化が, 支援者の行動を強化し, 肯定的な感情体験が起こる蓋然性を高めるという好循環を育んでいく. しかし, 思いわずらう, 考え続けるといったように, 悩むことが不十分な場合, 好循環から外れ, この人はこうだといった支援者による思い込みや決めつけにつながってしまう可能性がある. この二つの研究は, 重度知的障害者との良好な関係の形成のため, 支援者が何に留意すべきかについて, いくつかの示唆を与えてくれる.

以上のように、実証的な研究がいくつかあるが、その数は少なく、さらなる研究の蓄積が求められる。本研究では、支援者の肯定的な感情に着目した先行研究をふまえて作業仮説を設定し、計量的手法を用いて、重度知的障害者と支援者との良好な関係の形成過程を検証することを目的とした。計量的手法を用いる理由は、先行研究の中心を占める質的研究、特にインタビュー調査では、インタビューの自覚にない関連を明らかにすることが困難だからである。他方で、計量的手法であれば、当事者たちには自覚されない関連を発見することが容易である（小島・山本 2013 : 252）。

### 3. 作業仮説

ここでは、作業仮説<sup>2)</sup>を具体的に説明する。まず私たちが何かある行動をした際、その行動に対する応答は人によって異なる。そうした応答の違いによって、個々人に対する私たちの意味づけが変化し、その後の行動に変化を生む。例えば、話しかけた際に、ぼそぼそと返事をされるといった応答を繰り返されると、感じの悪い人という意味づけを行う（印象をもつ）だろうし、その意味づけゆえに、積極的に話しかけるといった行動はしなくなるだろう。このように個人間に起こった出来事の記憶（歴史）がまずもって他者に対しての意味づけの核となる。「なぜそっけないのか」と問われれば、「返事がはっきりしなくて感じが悪かったから」や「感じが悪い人だから」と、その理由を答えることができる。そして、個々人に対する意味や行動の違いが、一般に、関係の違いと呼ばれるものである。ただし、他者への意味づけは変化していくものであり、固定化されたものでは決してない。なんらかの出来事を契機として、意味づけが変化していくこともあり得る。すでに述べたように、良好な関係の形成という視点からは、支援者にとって肯定的な感情が生じる体験が一つの契機になる。そうした体験の蓄積が、良好な関係の指標となるような意味づけや行動を促進する。

以上の検討から、対人関係には、出来事（の蓄積）、意味づけ、行動という三つの要素が含まれることがわかる。つまり、出来事-意味づけ-行動の三項連関としての対人関係である。本研究では、対人関係を「特定の利用者に対する、出来事の蓄積のうえに成り立つ、支援者の意味づけおよび行動の傾向」と定義する<sup>3)</sup>。

この作業仮説は、先行研究の知見を包括的に位置づけることが可能であるし、常識という観点からも矛盾のないものである。奥西（2024）は、肯定的な応答（行動）→ 肯定的な感情体験（出来事）→ 支援者の意欲向上（意味づけ）→ 支援者の行動の強化（行動）→...といったサイクルを仮説モデルとして提示している。Penninga et al.（2022）も同様に、一緒に過ごす→ 相手を知る→ 重度知的障害者の微妙で特異な信号に気づくといった影響の過程を論じているが、これらも出来事→ 意味づけ→ 行動という枠組みに位置づけることができる。それゆえ、強調点は異なるとしても、出来事-意味づけ-行動としての対人関係という作業仮説は、妥当なものであると考える。

以上の作業仮説を図示したものが、図 1 である。前後関係を考慮し、過去に位置づけられる出来事の蓄積を起点とし、意味づけを媒介して、行動に効果を与えるパスを想定している。さらに、対人関係には、本人側の要因、相手側の要因、二人がかかわってきた時間の蓄積といった複数の要因が関連してくる（山口ら 2013）。利用者の基本属性とかかわってきた時間は、現在の意味づけと行動以外にも、出来事の生起に関連すると考えられるため、出来事の蓄積、意味づけと行動

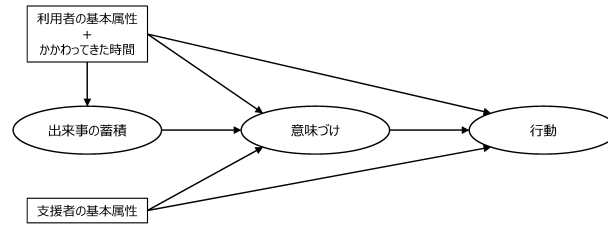


図 1 作業仮説のパス図

への効果を想定した。支援者側の要因として、支援者の知的障害者への共感的態度や肯定的な質問紙調査によって検討した米倉・山口（2021）は、それらの態度に関連する要因として、経験年数、雇用形態、知的障害や発達障害の研修などをあげている。本研究においても、研修の受講や経験年数といった支援者の基本属性は、現在の意味づけと行動に関連すると考えられるため、それぞれに効果を想定した。

## II. 調査の概要

### 1. 調査対象と方法

調査対象者は、A 県下の重度知的障害者が利用することが想定される施設入所支援、共同生活援助、生活介護、行動援護の各事業所で直接支援を担う支援者である。A 県が公開している事業所一覧の Excel データを活用し、2022 年 4 月 1 日時点での全事業所（施設入所支援：89 事業所、共同生活援助：550 事業所、生活介護：467 事業所、行動援護：56 事業所の計 1,137 事業所）を対象として、質問紙を郵送した。回答に際しては、SurveyMonkey を利用した Web 回答を原則とした。1 カ所につき 5 名の支援者に対して、無記名の自己式質問紙の回答を依頼した。なお、回答者の選定は各施設に一任した。調査期間は、2022 年 11 月 25 日～2022 年 12 月 31 日である。

### 2. 質問紙の構成

質問紙では、Penninga et al. (2022) と奥西 (2024) の結果をふまえ、良好な関係の指標となる、肯定的な感情が生じるであろう体験（出来事）、利用者への肯定的な意味づけ、関係を促進する利用者に対する行動を質問項目に落とし込んだ。2 回の予備調査を行うとともに、援助関係を主たる対象とする研究者にエキスパート・レビューを依頼し、表現や文言の修正を行った。

#### 1) 出来事、意味づけ、行動

出来事、意味づけ、行動については、最初に「あなたが普段接している利用者の中から言葉でのコミュニケーションが難しい利用者を 1 人選んで、その人のことを思い浮かべてください」という教示文を示し、特定の利用者（A さん）を想起して回答するよう依頼した。

出来事は、支援者に肯定的な感情が生じると考えられる体験を選択した。「支援によって A さんのできることが増えた」といった 16 項目を用いた。体験の頻度（蓄積）を「経験がない」から「毎日のように経験している」までの 4 件法で質問した。点数が高いほど、体験の頻度（蓄積）が多いことを示す。

意味づけは、「A さんの得意な活動がわかる」といった感情や利用者の理解に関する項目 20 項

目を用いた。「あてはまらない」から「よくあてはまる」までの4件法で質問した。点数が高いほど、利用者に対する意味づけが肯定的であることを示す。奥西（2024）の結果から、悩むことの欠如（思い込みや決めつけ）は、良好な関係形成にとって阻害要因となりうる。ゆえに、本研究でも不安や迷いに関連する項目を用いている。

行動は、関係をより良いものにするために重要とされる行動を選択した（以下、関係促進行動）。「Aさんとかかわるとき、今までとは違うことを試してみる」、「Aさんのちょっとした行動にも積極的に意味づけを行う」、「Aさんとかかわるとき、先回りせず、Aさんからの反応をしっかりと待つ」、「Aさんと他の支援者のかかわりを観察する」の4項目を用いた。普段のAさんに対する行動を「あてはまらない」～「よくあてはまる」までの4件法で質問した。点数が高いほど、関係促進行動を実施していることを示す。ただし、「緊急の対応が必要となる場面（自傷行為や他害行為の発生など）を除く」と教示した。なお、 $\alpha = .641$ であった。

## 2) その他

支援者の基本属性として、性別、年齢、雇用形態、障害者福祉領域における経験年数、知的障害に関連する研修受講の有無を質問している。利用者の基本属性として、療育手帳の等級、重複障害の有無を質問している。かかわってきた時間については、「Aさんと出会ってから、どのくらい経ちましたか」と質問している。

## 3. 分析方法

本研究では、構造方程式モデリングを分析方法に採用した。その理由は、柔軟に複数の要因間の関連をモデル化すること、効果を直接効果と間接効果に分解すること、モデルについて、データとフィットしているかという観点（適合度）から評価することが可能だからである（狩野2002）。こうした構造方程式モデリングのメリットは、良好な関係の形成という複雑な現象への理解を深めるのに有用である。

具体的な手順は、次のとおりである。まず各項目の記述統計を確認した。次に変数を要約する目的で、意味づけと出来事に対して、探索的因子分析を行った。その後、意味づけと出来事は抽出された因子の下位尺度の項目合計得点、関係促進行動は項目合計得点を用いて、関係促進行動を目的変数、その他の変数を説明変数として、重回帰分析を行った。重回帰分析の結果から変数を絞り込み、作業仮説に基づいて、構造方程式モデリングによる分析を行った。

分析には IBM SPSS ver.27, JASP ver 0.18.1 を用いた。

## 4. 倫理的配慮

質問紙の依頼文には、調査目的・概要、調査協力は本人の判断に委ねられること、回答の有無によって不利益が生じないこと、得られたデータは厳重に保管・管理され、研究終了後は破棄されること、回答は統計的に処理され個人や事業所が特定されないことなどを明記した。また、回答をもって本調査への参加同意とする旨も依頼文に記載した。

なお、本調査は東洋大学大学院ライフデザイン学研究科の研究等倫理委員会の承認を得て実施した（2022-3S）。

### III. 結果

#### 1. 回収率と欠損値の取り扱い

465件の回答が得られた(回収率8.18%)。うち欠損値の多い28件とほとんどの項目が同様の回答であった2件を除く、435件を対象とした(有効回答率7.7%)。435件の欠損の構造は、質問項目に依存しないランダムなものと考えられるため、各分析では、リストワイズ除去によって分析を行った。

#### 2. 記述統計

支援者の基本属性は、次のとおりである。性別(n=397)は、男性46.6%、女性53.1%、その他0.3%であった。年齢(n=393)は、平均42.9歳( $SD\pm 12.8$ )で、範囲は18~76歳、そのうち30代が一番多く、27.2%を占め、次に40代の23.9%、50代の20.9%と続いた。雇用形態(n=396)は、正規が85.4%を占めていた。研修受講の有無(n=384)は、ありが64.8%で半数を超えていた<sup>4)</sup>。障害者福祉領域における経験年数(n=388)は、平均123.7カ月( $SD\pm 96.1$ )で、範囲は1~432カ月であった。関係促進行動(n=434)の合計得点は、平均10.36( $SD\pm 2.18$ )であった。

利用者の基本属性は、次のとおりである。療育手帳の等級(n=408)は、最重度33.6%、重度43.4%、中軽度7.1%、わからない15.9%であった。重複障害(n=404)の有無は、ありが73.8%で半数を超えていた<sup>5)</sup>。

かかわってきた時間(n=406)は、平均62.7カ月( $SD\pm 65.0$ )で、範囲は1~363カ月であった。

#### 3. 探索的因子分析

まず記述統計量を確認した。出来事の項目「6. 困っているとき、Aさんが助けてくれた」が平均1.58( $SD\pm 0.74$ )で、床効果を示した。しかし、分析を妨げる深刻な状況ではないことと、項目として重要であることから、すべての項目を投入し探索的因子分析(プロマックス回転を伴う重みつき最小二乗法)を行った。スクリーンプロットや解釈可能性などの複数の観点から、因子数を決定した。その結果、意味づけと出来事ともに3因子構造が妥当であると判断した。最終的な因子パターンと因子相関を表1、2に示す。各因子の下位尺度の項目合計得点を算出し、重回帰分析に用いた。

意味づけの第1因子は13項目で構成されており、自信があるなど肯定的な感情を含みつつ、利用者に対する理解の度合いや知識の量に関する項目が高い因子負荷量を示していた。そこで「利用者理解」と命名した( $\alpha = .895$ )。意味づけの第2因子は5項目で構成されており、利用者の能力に対する信頼に関連する項目が高い因子負荷量を示していた。そこで「利用者の能力への信頼」と命名した( $\alpha = .791$ )。意味づけの第3因子は2項目で構成されており、支援に対しての悩みや不安を示していた。そこで「利用者への迷いや不安」と命名した( $\alpha = .697$ )。

出来事の第1因子は6項目で構成されており、日常的なかかわりのなかでのさまざまな気持ちの共有に関する項目が高い因子負荷量を示していた。そこで「気持ちの共有」と命名した( $\alpha = .820$ )。出来事の第2因子は5項目で構成されており、利用者自身の変化に関する項目が高い因子負荷量を示していた。そこで「利用者の変化」と命名した( $\alpha = .820$ )。出来事の第3因子は5項目で構成されており、認識の変化なども含め、支援者自身の変化に関する項目が高い因子負

表1 意味づけの探索的因子分析結果

n = 423	因子1	因子2	因子3	独自性
<b>第1因子「利用者理解」</b>				
8. Aさんが不安定になったとき、どうすれば落ち着くかわかる	<b>0.784</b>	-0.130	0.031	0.500
4. Aさんが不快に感じる刺激や苦手なものがある	<b>0.745</b>	-0.130	0.187	0.529
5. さまざまな場面で、Aさんがどう行動するのか、だいたい予測がつく	<b>0.723</b>	-0.108	0.027	0.567
3. Aさんがどんなことに興味関心を抱いているのかわかる	<b>0.658</b>	-0.112	0.008	0.650
18. Aさんの表情や行動から、なんとなくAさんの気持ちがわかる	<b>0.611</b>	0.049	0.004	0.585
6. Aさんがどんな人生を歩んできたのかわかる	<b>0.592</b>	-0.084	-0.010	0.706
1. Aさんの得意な活動がわかる	<b>0.570</b>	0.025	-0.056	0.653
13. Aさんに自分の意図を伝えるためには、どのような方法が有効かわかる	<b>0.549</b>	0.171	-0.162	0.535
11. Aさんとなんとかうまくやっていく自信がある	<b>0.515</b>	0.253	-0.123	0.502
15. Aさん独自のコミュニケーションの取り方を理解できる	<b>0.510</b>	0.242	-0.038	0.525
14. Aさんのことをとても親密に感じる	<b>0.459</b>	0.232	0.025	0.595
10. Aさん他の人が、どのようにかかわっているのかわかる	<b>0.457</b>	0.229	-0.019	0.606
2. Aさんのいいところを具体的に10個以上あげることができる	<b>0.411</b>	0.249	-0.001	0.637
<b>第2因子「利用者の能力への信頼」</b>				
12. Aさんはいろんなことを理解していると思う	-0.133	<b>0.852</b>	-0.146	0.438
9. Aさんはいろんなことを考えていると思う	-0.103	<b>0.832</b>	0.038	0.393
16. Aさんはいろんなことを感じていると思う	0.064	<b>0.642</b>	0.141	0.470
7. Aさんはいろんなことができると思う	0.036	<b>0.556</b>	-0.019	0.668
20. Aさんのことをもっと知りたい	0.034	<b>0.420</b>	0.325	0.637
<b>第3因子「利用者への迷いや不安」</b>				
19. Aさんへの支援について、いろいろな悩みがある	0.085	-0.123	<b>0.787</b>	0.416
17. Aさんとかかわるとき、このやり方でよいのかどうか不安になることがある	-0.109	0.117	<b>0.669</b>	0.508
	因子1	1	0.644	-0.001
	因子相関行列	因子2	1	0.226
		因子3	1	1

因子抽出法；重みつき最小二乗法 回転方法；プロマックス回転

表2 出来事の探索的因子分析結果

n = 427	因子1	因子2	因子3	独自性
<b>第1因子「気持ちの共有」</b>				
13. Aさんが自分を頼ってくれた	<b>0.813</b>	0.288	-0.310	0.289
4. 特に用事がなくても、Aさんのほうから、かかわろうとしてくれた	<b>0.686</b>	0.015	-0.087	0.583
14. Aさんから元気づけられた、励まされたと感じた	<b>0.575</b>	-0.230	0.352	0.508
12. Aさんとうまく通じ合えたと感じた	<b>0.567</b>	0.174	0.014	0.513
15. Aさんが要求を伝えてくれた	<b>0.558</b>	0.130	0.035	0.552
6. 困っているとき、Aさんが助けてくれた	<b>0.470</b>	0.041	0.066	0.708
<b>第2因子「利用者の変化」</b>				
3. 支援によってAさんのできることが増えた	-0.006	<b>0.727</b>	0.019	0.460
2. 支援によってAさんの不適切な行動が減った	0.108	<b>0.604</b>	-0.006	0.548
7. Aさんの成長を感じた	0.102	<b>0.532</b>	0.203	0.441
8. Aさんの好きなものや活動を見つけた	0.067	<b>0.493</b>	0.211	0.522
16. Aさんが新しいことに興味関心を持った	0.221	<b>0.429</b>	0.090	0.571
<b>第3因子「支援者の変化」</b>				
1. 周囲の人の話から、Aさんの新しい一面を知った	-0.187	0.157	<b>0.589</b>	0.651
10. Aさんとかかわりを通して自分自身が成長したと感じた	0.328	-0.147	<b>0.573</b>	0.476
5. 周囲の人の話から、自分とは違ったAさんの捉え方を知った	-0.130	0.178	<b>0.570</b>	0.622
11. Aさんとかかわりを通して、さまざまなことを考えさせられた	0.249	-0.062	<b>0.528</b>	0.555
9. Aさんについて新しい発見や気づきがあった	0.006	0.353	<b>0.498</b>	0.405
	因子1	1	0.614	0.610
	因子相関行列	因子2	1	0.614
		因子3	1	1

因子抽出法；重みつき最小二乗法 回転方法；プロマックス回転

表 3 重回帰分析の結果

n=340	関係促進行動						VIF
	β	B	SE	95%CI		p	
				下限	上限		
切片		3.076	0.859	1.387	4.765	0	
利用者理解	0.282	0.088	0.022	0.046	0.131	0	2.386
利用者の能力への信頼	0.081	0.057	0.042	-0.025	0.139	0.174	1.797
利用者への迷いや不安	0.2	0.298	0.073	0.156	0.441	0	1.198
気持ちの共有	-0.015	-0.009	0.041	-0.089	0.071	0.829	2.333
利用者の変化	0.113	0.098	0.059	-0.019	0.215	0.101	2.367
支援者の変化	0.176	0.163	0.062	0.04	0.285	0.01	2.311
かかわってきた時間	-0.130	-0.004	0.002	-0.008	-74.21	0.02	1.561
経験年数	0.015	0.0003	0.001	-0.002	0.003	0.799	1.687
研修受講ありダミー	-0.022	-0.1020	0.226	-0.547	0.342	0.651	1.237
年齢	-0.054	-0.009	0.009	-0.028	0.009	0.319	1.456
男性ダミー	0.063	0.275	0.208	-0.134	0.685	0.187	1.158
正規ダミー	-0.114	-0.722	0.318	-1.348	-0.095	0.024	1.273
軽度中度ダミー	0.066	0.538	0.376	-0.203	1.278	0.154	1.074
重複ダミー	0.064	0.317	0.228	-0.131	0.765	0.164	1.068

F(14, 325) = 12.947  
p = 0.000  
調整済R<sup>2</sup> = 0.330

荷量を示していた。そこで「支援者の変化」と命名した ( $\alpha = .779$ )。

#### 4. 重回帰分析

関係促進行動を目的変数、他の全変数を説明変数とした重回帰分析（強制投入法）の結果を、表 3 に示す。直接効果をもっていたのは、「利用者理解」、「利用者への迷いや不安」、「支援者の変化」、かかわってきた時間、正規ダミーであった。正負に着目すると、かかわってきた時間と正規ダミーが、負の効果をもっていた。VIF が 3 を超えるものはなかった。

#### 5. 構造方程式モデリング

重回帰分析の結果（表 3）から、変数を絞り込んだうえで、構造方程式モデリングによる分析を行った（対角重みつき最小二乗法；DWLS）。使用する変数は、関係促進行動、「利用者理解」、「利用者への迷いや不安」、「支援者の変化」、「利用者の変化」、かかわってきた時間、経験年数、研修受講の有無の 8 変数である。性別、年齢、雇用形態（支援者の基本属性）、療育手帳の等級、重複障害の有無（利用者の基本属性）を統制変数とした<sup>6)</sup>。

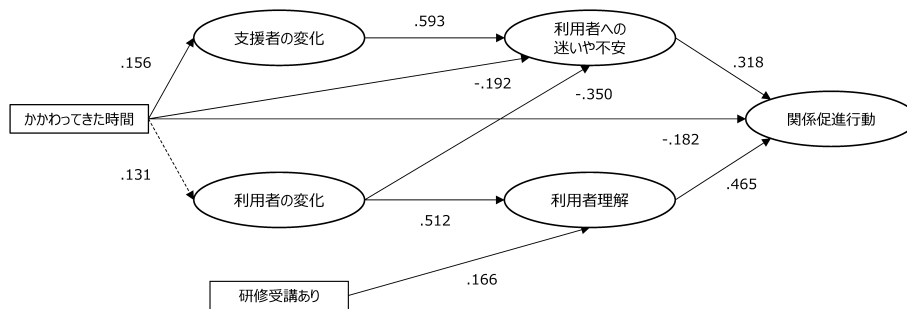
まず全体の分析に先立ち、「利用者理解」、「利用者への迷いや不安」、「支援者の変化」、「利用者の変化」の潜在変数部分について、斜交モデルによる確証的因子分析（DWLS）を実施した。なお、モデルが複雑化することを避けるため、「利用者への迷いや不安」を除く各因子の観測変数には、上位四つのみを使用した<sup>7)</sup>。加えて、「利用者の変化」は、解釈可能性の観点から項目番号 8 ではなく、16 を使用、「利用者理解」も同じく解釈可能性の観点から項目番号 3 ではなく、11 を使用した。また、関係促進行動についても、四つの質問項目を潜在変数化して分析に加えた。その結果、データに対するモデル適合度は、 $\chi^2(df) = 294.018(125)$ 、CFI = 0.983、



表 4 構造方程式モデリングの推定結果（非標準化係数と標準化係数）

n=349	支援者の変化			利用者の変化			利用者理解			利用者への不安や迷い			関係促進行動		
	β	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β	B	SE	β	B	SE
かかわってきた時間	0.156	0.002	0.0007	0.131	0.001	0.0008	0.109	0.001	0.0008	-0.192	-0.002	0.0010	-0.182	-0.002	0.0007
経験年数							0.028	0.0002	0.0006	-0.006	-0.0001	0.0007	0.098	0.0006	0.0005
研修受講あり							0.166	0.268	0.105	-0.093	-0.149	0.108	-0.012	-0.016	0.083
支援者の変化							0.103	0.120	0.119	0.593	0.687	0.174	0.171	0.162	0.126
利用者の変化							0.512	0.553	0.113	-0.350	-0.374	0.141	0.176	0.154	0.11
利用者理解													0.465	0.375	0.074
利用者への不安や迷い													0.318	0.26	0.065
年齢							-0.073	-0.005	0.004	-0.119	-0.007	0.004	-0.114	-0.006	0.004
男性							0.115	0.177	0.097	0.059	0.09	0.101	0.052	0.065	0.079
正規							0.004	0.008	0.152	0.062	0.139	0.149	-0.115	-0.209	0.122
程度中程度	0.03	0.076	0.18	0.087	0.236	0.177	0.031	0.09	0.148	-0.036	-0.103	0.194	0.056	0.133	0.144
重複	0.173	0.261	0.093	0.075	0.122	0.107	-0.004	-0.007	0.104	-0.057	-0.1	0.112	0.087	0.125	0.089
R <sup>2</sup>		0.056		0.029			0.455			0.217			0.679		

χ<sup>2</sup> (df) = 391.409 (239), CFI=0.980, RMSEA=0.043 (p = 0.942) 推定法 ; DWLS  
 \*\*=p < .01 †=p < .05 ‡=p < .10  
 相関, 誤差相関の推定結果は省略した。



n=349, χ<sup>2</sup> (df) = 391.409 (239), CFI=0.980, RMSEA=0.043 (p = 0.942) 推定法 ; DWLS  
 注 : 図が煩雑になるのを避けるため, 観測変数を省略し, 10%水準以下で有意なパスのみ表示した。  
 実線は5%水準で, 破線は10%水準で有意であることを示す。

図 2 係促進行動へのパス図（標準化係数）

RMSEA = 0.056 (p = 0.101) であった。

次に, 図 1 の作業仮説をもとに, 出来事の蓄積(「支援者の変化」と「利用者の変化」) → 意味づけ(「利用者理解」と「利用者への迷いや不安」) → 行動(関係促進行動)というパスを仮定し分析を行った。これらのパスについては完全逐次モデルを設定している。なお, 各外生変数間に相関を, 「支援者の変化」と「利用者の変化」, 「利用者理解」と「利用者への迷いや不安」の因子間に誤差相関を, それぞれ設定した。

表 4 は, 構造方程式モデリングの推定結果である。モデルの適合度は,  $\chi^2(df) = 391.409(239)$ , **CFI=0.980, RMSEA=0.043 (p = 0.942)** であった。CFI > 0.950, RMSEA < 0.05 であり, モデルは十分に適合している。図 2 は, 表 4 のうち, 10%水準で有意なパスのみを示したパス図である。

図 2 をみると, 関係促進行動に対して直接効果をもつものは, 「利用者への不安や迷い」, 「利用者理解」, かかわってきた時間である。「支援者の変化」と「利用者の変化」は, 直接効果をもたず, 「利用者への不安や迷い」, 「利用者理解」を経由して間接効果をもっていた。研修受講は, 「利用者理解」を経由して間接効果をもっていた。

個々の要因が関係促進行動に与える相対的な効果はどの程度なのか, 効果を分解した結果を示したのが表 5 である。ここでは, 直接効果, 媒介変数を経由した間接効果の合計<sup>8)</sup>, 直接効果と間接効果を合計した総合効果を示している。また, 間接効果に関する検定により有意であった媒

表 5 効果の分解 (標準化係数)

	総合効果	直接効果	間接効果	
			全体	有意な媒介経路
かかわってきた時間	-0.090	-0.182 *	0.093 †	0.029 † →支援者の変化→利用者への不安や迷い→関係促進行動 -0.061 * →利用者への不安や迷い→関係促進行動
経験年数	0.109	0.098	0.011	
研修受講ありダミー	0.035	-0.012	0.047	0.077 * →利用者理解→関係促進行動
支援者の変化	0.408 **	0.171	0.236 **	0.189 ** →利用者への不安や迷い→関係促進行動
利用者の変化	0.303 †	0.176	0.127 †	0.238 ** →利用者理解→関係促進行動 -0.111 * →利用者への不安や迷い→関係促進行動
利用者理解	0.465 **	0.465 **		
利用者への不安や迷い	0.318 **	0.318 **		

\*\* =  $p < .01$  \* =  $p < .05$  † =  $p < .10$

介経路も示している。

表 5 をみると、かかわってきた時間や経験年数、研修受講といった支援者の基本属性は、概ね同程度の総合効果をもつことがわかる。潜在変数に着目すると、総合効果が大きいものは、順に「利用者理解」「支援者の変化」「利用者への不安や迷い」、「利用者の変化」であった。

#### IV. 考察

##### 1. 支援者の基本属性および、かかわってきた時間と関係促進行動との関連

支援者の基本属性では、研修受講ありが「利用者理解」を経由した有意な間接効果をもっている。このことは、研修受講は「利用者理解」をとともなうことで、関係促進行動に対して効果をもつことを示している。Forster & Iacon (2008) は、トレーニングや研修が意義のあるものとなるためには、自分たちが日々支援する特定の人物と関連づけられる必要があると指摘しているが、この結果は、そうした指摘を補強する。

他に注目される点は、かかわってきた時間が媒介変数を設定したうえで、5%水準で、関係促進行動に対して直接効果をもっていたことである。直接効果は、-0.182 で負の効果を持ち、さらに「利用者への不安や迷い」を経由して -0.061 の負の間接効果をもつ。結果として、総合効果でも、負の効果をもつ。こうした負の効果は、不安や迷いのない、よくない意味での「慣れ」を示していると考えられる。その一方で、「支援者の変化」から「利用者への不安や迷い」を経由した間接効果は正の効果 (0.029) をもち、間接効果を全体としては、0.093 で正の効果をもつ。これらの事実から、かかわってきた時間には、複雑な側面があることがわかる。

加えて、かかわってきた時間と経験年数では、関係促進行動や意味づけに対して、異なった効果を示している。経験年数が関係促進行動や意味づけに対して、有意な影響を与えていないのに対して、かかわってきた時間が有意な影響を与えているという事実は、それらの変数が質的に異なっている可能性を示唆している。良好な関係形成のためには、二人がかかわってきた時間の蓄積がより重要になる。

ただし、表 5 にあるように、支援者の基本属性および、かかわってきた時間が、関係促進行動に対して与える総合効果は、0.1 前後かそれ以下であった。したがって、相対的にみると、総合効果がすべて 0.3 を超える出来事と意味づけの各要因と比較し、支援者の基本属性および、かかわってきた時間は、関係促進行動に対して強い影響を与えているとはいえない。

## 2. 良好な関係の形成過程を構成する二つの経路

図2を確認すると、適合度も十分に高く、出来事 → 意味づけ → 行動という当初の作業仮説と概ね一致する結果が得られた。良好な関係の形成という観点からは、次の点が示唆される。間接効果に関する検定の結果、関係促進行動に対して有意な効果をもつ経路が、大きく分けて二つ存在していた。一つは、「利用者の変化」から「利用者理解」を経由する経路であり、もう一つは、「支援者の変化」から「利用者への不安や迷い」を経由する経路である。この二つの経路は、「利用者の変化」から「利用者への不安や迷い」へのパスによって結ばれているが、負の効果(-0.350)をもっていることから、これらの経路は質の異なった経路であると考えられる。

前者の経路は、問題状況 → アセスメント → 介入 → 改善といった、一般的な支援過程の延長上に位置づけることができるだろう。利用者の問題状況の改善や成長への手助けといった「利用者の変化」の蓄積が、行動の予測やかかわりへの自信といった「利用者理解」を促していく。他方で、「利用者の変化」の蓄積が、「利用者への不安や迷い」に対して負の効果をもつということは、できることが増えた、不適切な行動が減ったというように利用者に対してうまく支援することができたといった自信を与えるがゆえに、「利用者への不安や迷い」を減らすと解釈できる。

後者の経路は、「支援者の変化」という出来事を体験する頻度が多い人は、結果として、多角的な視点から利用者、あるいは利用者を取り巻く状況をみるのが可能となり、「利用者への不安や迷い」が高くなるという関連があると考えられる。しかし、「利用者への不安や迷い」は関係促進行動に対して正の効果をもち、その意味でネガティブなものではない。この点については、迷い悩むことの実践的な意義を指摘した古井(2016)や奥西(2024)といった先行研究の結果とも符合する。例えば、地域生活支援における重度知的障害者本人が求める支援者との関係を明らかにしようとした古井(2016:99)は、参与観察によって得られたデータを分析し、「居住者は自らを迷いながら支援している職員を支持していた」と結論づけている。

ここまでの検討から、「利用者の変化」がもつ、支援者にとっての負の側面が浮かび上がる。「利用者の変化」は、「利用者への不安や迷い」を経由して、関係促進行動に対して、負の間接効果(-0.111)をもつのだが、これは強く言えば利用者に対する支援者の慢心を示しているといえることができる。うまく支援することができたといった自信が、慢心と裏腹であるという解釈は、常識に照らして、突飛なものではない。Peninga et al.(2022)や奥西(2024)の研究では、「利用者の変化」に類する概念は、肯定的に評価されるのみであり、それらがはらむ危うさについては指摘されていない。したがって、この点は、計量的手法による発見であるといえるだろう。

## 3. 実践への示唆および、研究の限界と今後の課題

本研究では、先行研究をふまえて作業仮説を設定し、計量的手法を用いて、重度知的障害者と支援者との良好な関係の形成過程を検証した。その結果、良好な関係の形成過程を構成する二つの経路を可視化することができた。

結果からは、第一に、研修を行う場合、単に知識が伝達されるのではなく、自分たちにかかわりのある利用者と関連づけながら知識を獲得できるような工夫が必要であることが示唆される。例えば、相談支援専門員の研修では、インターバル実習のように、支援者が現在かかわっている利用者を対象とした、事例検討などが行われている。事業所にアドバイザーが派遣されるような

形式も含め、かかわりのある特定の利用者と関連づけられた形で学ぶことが重要であろう。第二に、「利用者の変化」という出来事と同様に、「支援者の変化」という出来事も、良好な関係形成にとっては重要であることが示唆された。すでに利用者の変化に焦点化した研修には、強度行動障害支援者養成研修などが用意されているが、価値観や利用者の見方の変化といった、支援者の変化に焦点化した研修は用意されておらず、Tajima et al. (2023) が開発を試みているような、支援者の内省を支援する研修もまた必要であると考えられる。

一方で、本研究には、課題も多い。第一に、回収率が低く、データの代表性という点では懸念が残るため、今後、さらなる追加の調査が必要である。第二に、本研究で重要な変数であることが示唆された「利用者への迷いや不安」の因子については、観測変数の項目数が2つしかないため、解が安定しない可能性がある。そのため、「利用者への迷いや不安」を測定する新しい項目を追加し、検証を重ねていく必要がある。第三に、対人関係のもう一端である利用者からの視点十分に含まれていない。ただ、重度知的障害者の場合、質問紙調査というアプローチでは回答することがそもそも難しい。そのため、行動観察といった手法を含めて、対人関係にアプローチする必要がある。あるいは、質問紙調査を前提とするならば、McLaughlin & Carr (2005) が行ったように、複数の視点から関係の質を評価するといった手法も考えられる。第四に、横断調査というデータの制約上、因果関係の識別ができていない。本研究の作業仮説をより精緻化していくためには、同一個人を追跡してデータを得る縦断調査を実施する必要がある。

## 謝辞

お忙しいなか、本調査にご協力いただいた支援者の方々に感謝申し上げます。

また、本調査は、東洋大学井上円了記念研究助成を受けた実施されました。記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 知的障害が「重度」であるとは何を意味するのかについては議論があるが、本研究では、古井 (2016) を参考にしつつも、ある支援者にとってその利用者との「言葉でのコミュニケーションが難しい」ことをその指標とした。その理由は、田中 (2007) が述べるように「《重度》という形容が示す一つの意味は、支援 - 被支援関係における意思の交換の困難さでもある」と考えるからである。したがって、療育手帳の等級における重度・最重度が、そのまま「重度」であることを示すわけではない。また、調査でも、条件を追加して対象となる利用者像を絞ることはしなかった。その理由は、上述した理由に加え、支援者自身が想起することが容易な利用者を選んでもらうほうが、質の高いデータが得られると考えたためである。
- 2) ここでの作業仮説とは、仮説検証型の研究が意味するような厳密な意味での仮説ではなく、『完全にパス図が描ける』ほどには成熟していないけれども、『全くどんな関係があるのか想定できない』ほど無策でもなく、その中間程度に位置する」(小島・山本 2013 : 153) 仮説である。なお、ここで想定している仮説検証型の研究とは、先行研究の検討などから、事前に明確な仮説を設定し、その仮説を検討できるデータを収集し、データに基づいて当該の仮説が支持されるか棄却されるかを判断する直線的なプロセスをたどるものである。この場合、当初の仮説に含まれないデータの関連は、検討の対象外となる。つまり、発見的機能は

無視される。

- 3) もちろんこのような表現は、あまりにも事態を単純化しすぎており、実際にはもっとさまざまな事柄が複雑に絡み合い、入り組んだ様相を呈している。しかし、本研究では、事態を単純化するため、Aさんという利用者個人を想定して議論を行う。
- 4) 研修受講については、複数回答で詳細を質問している。行動援護従業者養成研修 5.2%、重度訪問介護従業者養成研修 1.3%、強度行動障害支援者養成研修（基礎）45.1%、強度行動障害支援者養成研修（実践）28.9%、その他 22.9%であった。一つでも該当する場合は、ありとしている。
- 5) 重複障害については、複数回答で詳細を質問している。肢体不自由 19.3%、聴覚障害 3.5%、視覚障害 5.2%、自閉スペクトラム症 30.9%、てんかん発作 26.0%、精神疾患 3.0%、行動障害 1.2%、その他 4.7%であった。一つでも該当する場合は、ありとしている。
- 6) 性別については、男性を 1、女性とその他を 0、雇用形態については、正規を 1、その他を 0、研修受講と重複障害については、ありを 1、なしを 0、療育手帳の等級については、軽度中度を 1、その他を 0 としてそれぞれ投入した。
- 7) 構造方程式モデリングでは、理論的に、潜在変数を構成する観測変数は 4 以上が望ましいとされるため、ここでは上位四つの観測変数を使用した。また、観測変数が二つしかない場合も、他にも潜在変数およびその観測変数があり、潜在変数間に相関やパスが設けられているのであれば、モデル全体として識別可能であるため、「利用者への迷いや不安」因子もモデルに含めた（小島・山本 2013：128-31）。
- 8) 間接効果は、媒介関係にあるパス係数の積である。例えば、研修受講あり → 利用者理解 → 関係促進行動という媒介経路であれば、研修受講ありから「利用者理解」への直接効果（0.166）と「利用者理解」から関係促進行動への直接効果（0.465）の積で、0.077 と求めることができる。複数の経路がある場合は、複数の経路を合計したものが間接効果となる（足立 2006：62-3）。表 5 で示しているものも、複数の経路を合計した数値である。

## 引用文献

- 足立浩平（2006）『多変量データ解析法——心理・教育・社会系のための入門』ナカニシヤ出版。
- Berry, K., Barrowclough, C. and Haddock, G. (2011) The Role of Expressed Emotion in Relationships Between Psychiatric Staff and People With a Diagnosis of Psychosis: A Review of the Literature, *Schizophrenia Bulletin*, 37, 958-72.
- 古井克憲（2016）『重度知的障害者の地域生活におけるパーソン・センタード・プランニングの実践過程——「語れない」人々が求める支援とは何か』大阪公立大学共同出版会。
- Forster, S. and Iacono, T. (2008) Disability Support Workers' Experience of Interaction with a Person with Profound Intellectual Disability, *Journal of Intellectual & Developmental Disability*, 33, 137-47.
- Hastings, R. P. (2010) Support Staff Working in Intellectual Disability Services: The Importance of Relationships and Positive Experiences, *Journal of Intellectual & Developmental Disability*, 35, 207-10.
- 久野真知子（2020）「ホームヘルパーは『重度知的障害者』との関わりをどのように経験しているのか？——現象学的アプローチによる記述と分析を通して」『北海道社会福祉研究』40, 1-13.

- Johnson, H., Douglas, J., Bigby, C. et al. (2012) A Model of Processes That Underpin Positive Relationships for Adults With Severe Intellectual Disability, *Journal of Intellectual Developmental Disability*, 37, 324–36.
- 狩野 裕 (2002) 「構造方程式モデリングは、因子分析、分散分析、パス解析のすべてにとって代わるのか?」『行動計量学』29, 138–59.
- 小島隆矢・山本将史 (2013) 『Excel で学ぶ共分散構造分析とグラフィカルモデリング : Excel2013/Excel2010/2007 対応版』オーム社.
- 鯨岡 峻 (1998) 「関係が変わるとき」秦野悦子・やまだようこ編『コミュニケーションという謎』ミネルヴァ書房, 173–200.
- McLaughlin, D. M. and Carr, E. G. (2005) Quality of Rapport as a Setting Event for Problem Behavior, *Journal of Positive Behavior Interventions*, 7, 68–91.
- 奥西 允 (2024) 「重度知的障害者と支援者との良好な関係の形成に関する質的研究——肯定的な感情体験に着目した支援者へのインタビュー調査から」『社会福祉学評論』24, 70–84.
- Penninga, W., Nijs, S. L. P., van Bakel, H. J. A. et al. (2022) Meaningful Moments of Interaction With People With Profound Intellectual Disabilities: Reflections From Direct Support Staff, *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 35, 1307–16.
- Robertson, J., Emerson, E., Gregory, N. et al. (2001) Social Networks of People With Mental Retardation In Residential Settings, *Mental Retardation*, 39, 201–14.
- Schalock R. L. (2004) The Concept of Quality of Life: What We Know and Do Not Know, *Journal of Intellectual Disability Research*, 48, 203–16.
- 立田瑞穂・郷間英世・牛山道雄 (2013) 「成人知的障害者の QOL 評価——Schalock らの QOL 質問紙日本語版作成と試行」『発達障害研究』35, 361–71.
- Tajima, A., Ikeda, K., Ota, K. et al. (2023) Toward the Development of a Training Program That Promotes a “Social Model Of Disability” for Physical Therapists: A Discussion on Experiential Learning Surrounding the Use of “Acceptance of Disability” by Physical Therapists, *Journal of Physical Therapy Science*, 35, 471–8.
- 田中耕一郎 (2007) 「社会モデルは〈知的障害〉を包摂し得たか」『障害学研究』3, 34–63.
- 山口 啓・吉田 学・今田美幸・ほか (2013) 「対人関係におけるつながり感予測式の検証」『情報処理学会研究報告』33, 1–6.
- 米倉裕希子・山口創生 (2021) 「知的障害者に対する施設職員のスティグマティゼーションに関する横断研究」『関西福祉大学研究紀要』24, 51–9.

# **A Study of Processes of Building Positive Relationships between Direct Support Staff and Persons with Severe Intellectual Disability: Analysis by Structural Equation Modeling**

Makoto OKUNISHI

The purpose of this study was to examine the processes of building positive relationship with persons with severe intellectual disability (PSID) from the viewpoint of direct support workers (DSW) using structural equation modeling. The working hypothesis of this study is that the history of interaction with the other forms a specific meaning for the other, and then this meaning directs the behavior for the other. A self-administered, anonymous questionnaire was administered to DSW. As a result, I identified the two paths that constituted the processes of building positive relationship for PSID. One is the path from “Changes in PSID” to relationship-promotive behaviors via “Understanding of PSID”, and another one is the path from “Change in DSW” to the relationship-promotive behaviors via “Anxiety about PSID”. “Changes in PSID” had a negative effect on relationship-promotive behaviors via “Anxiety about PSID”.

**Key Words:** Severe intellectual disability, Interpersonal relationship, Structural equation modeling